

肥前びどろ

佐賀市重要無形文化財指定

肥前びどろとは

肥前びどろは佐賀市の重要無形文化財に指定されている手作りガラス食器の伝統工芸です。江戸末期から続く160年の技術を受け継ぎ、今では珍しくなってきた宙吹き製法を用いてひとつひとつお作りしております。

その、型を一切用いずに作るガラスの艶は他にはない風合いを持っており、また長い年月をかけて作りだした色合いも特長の一つとなっております。

そして現在では肥前びどろだけに残る宙吹き技法の一つ「ジャッパン吹き」も特長で、2本の竿を操り整形するガラスの「かんびん」や「ちろり」も大きな特長の一つとなっております。



ジャッパン吹きでの製造後景

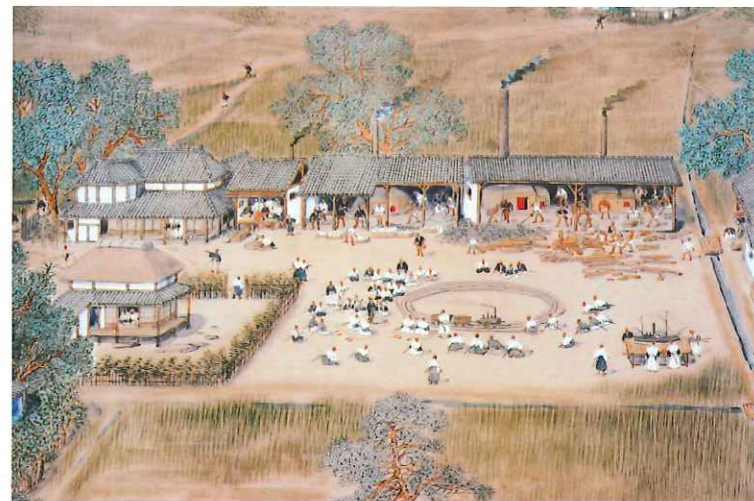


銀箔をあしらった「銀彩千代口」

歴史

佐賀（鍋島）藩10代藩主鍋島直正公が、嘉永五年（1852）多布施川のほとりに精煉方（今で言う理化学研究所）を設置したことが始まりと言われております。精煉方は、もともと生活必需品（金魚鉢・薬瓶・銘酒瓶など）や、学術研究所のために必要な道具を作った場所で、当時では珍しいガラス窯が築かれ、主に科学実験のためのピーカーやフラスコが作られました。

その後、開国・明治維新に入りランプや食器を作るようになっていた精煉方は、精煉所という民間会社となり、そこから明治36年に独立した副島源一郎が副島硝子工業を創業。現在では肥前びどろを製造する唯一の工房となりました。



佐賀藩精煉方絵図（財団法人鍋島報効会所蔵）



伝統のジャッパン吹きによって作られる「肥前かんびん」（左）と「長崎ちろり」（右）。